

仙台市文化財調査報告書第75集

仙台平野の遺跡群IV

—昭和59年度発掘調査報告書—

1985年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第75集

仙台平野の遺跡群IV

——昭和59年度発掘調査報告書——

1985年3月

仙台市教育委員会

序

本市の民間による開発等にかかる埋蔵文化財包蔵地の事前の発掘調査事業は、低成長時代に入った今日でも、都市計画上の市街化の拡大などに伴い、まだその件数は増加の一途をたどっています。こうしたなかで、開発側との調整協議の結果、比較的小規模な事業で国庫補助として対応した遺跡は、5遺跡に及んでいます。

本報告書は、こうした遺跡の調査成果についてまとめ公開するものであります。

埋蔵文化財がもつている特殊性とは申せ、発掘調査は常に開発側との摩擦が避けられない問題をかかえて、その調整に手間どっている実情もあります。しかし先人の歴史を知る手がかりは埋蔵されている遺産をもって囲り知る以外にないとするならば、これらはやはりかけがいのない文化遺産であると認知せざるを得ないのであります。

こうした遺産が一度失われてしまえば二度とその再現があり得ないことを十分理解し、日々保護行政に努めて参りたいと存じます。

最後に本調査に及んで、多くの方々の御協力をいただきましたこと、ここに深く感謝を申し上げ序といたします。

昭和60年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は国庫補助事業の緊急遺跡範囲確認事業に伴う、仙台平野の遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 本書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆………佐藤 隆・田中則和・金森安孝・斎野裕彦・渡辺 誠
遺構実測製図………田中則和・金森安孝・斎野裕彦
遺物実測製図………田中則和・金森安孝
遺構写真………田中則和・金森安孝・斎野裕彦・渡辺 誠
遺物写真………田中則和・木村浩二・金森安孝
編集………田中則和・金森安孝・斎野裕彦・渡辺 誠
3. 本書中、仙台城及び郡山遺跡の発掘調査報告は概報とし、詳細は仙台市文化財調査報告書「第76集「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」、同第74集「郡山遺跡V—昭和59年度発掘調査概報」の中にまとめている。
4. 遺構の略号は次のとおりとした。

S A	樋・材木列	S B	建物跡	S D	溝 路
S K	土 壤	S X	性格不明造構		
5. 本書中の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐藤：1973年)を使用した。
6. 地形図は建設省国土地理院発行の5万分の1「仙台」を使用した。
7. 実測図中の方位は、磁北に統一している。磁北は真北に対し西偏7.0°である。
8. 本調査は、昭和59年4月に着手し、昭和60年3月に全ての事業を終了した。

目 次

序 文 例 言

I. 調査計画と実績	1	
II. 発掘調査報告	3	
[1] 富沢水田遺跡	3	
1. 遺跡の位置と環境	2. 調査に至る経過	3. 基本層位
4. 発見遺構と出土遺物	5. まとめ	
[2] 山口遺跡		
1. 調査に至る経過	2. 調査の方法	3. 基本層位
4. 発見遺構	5. 出土遺物	6. まとめ
[3] 仙台城三ノ丸翼門跡	10	
1. 遺跡の位置と環境	2. 調査に至る経緯	3. 調査経過
4. 調査概要	5. まとめ	
[4] 陸奥国分尼寺跡	22	
1. 遺跡の位置と環境	2. 調査に至る経過	3. 基本層位
4. 発見遺構	5. 出土遺物	6. まとめと今後の課題
付編～陸奥国分尼寺跡の土壤～	庄子貞雄・山田一郎	
[5] 郡山遺跡	31	
1. 遺跡の位置と環境		
2. 調査概要		
(1) 第43次発掘調査	(2) 第45次発掘調査	(3) 第46次発掘調査
(4) 第47次発掘調査	(5) 第49次発掘調査	

I 調査計画と実績

仙台市内には、現在432箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地がある。これらは、私達の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であり、歴史をもの語る絶好の資料で、一度消滅すると復原することは不可能である。この文化財を保護し、市民生活に活用し、後世の人々に伝えていくことは私達市民の責務である。この埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に係る開発については、文化財保護法により発掘届・通知を提出することになっており、年々提出件数も増加の一途をたどり、昭和59年度は、270件になろうとしている。

そこで、仙台市教育委員会は、上記の届・通知の中の一部について、昭和56年度から国庫補助を受けて、「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施し、市内の遺跡の範囲確認、性格究明を行なうこととした。そこで、下記のような実施計画を立てた。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群にかかる個人の小規模な開発（個人住宅の建築等）、
などに伴う発掘調査
2. 調査面積



第1図 発掘調査遺跡位置図

3. 調査期間 昭和59年4月～昭和60年2月

4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

(課長) 阿部 達 (主幹) 早坂春一 (係長) 佐藤 隆

(主事) 田中則和・金森安孝・工藤哲司・斎野裕彦

(教諭) 小野寺和幸・渡辺 誠

同課文化財管理係

(係長) 佐藤政美 (主事) 岩沢克輔・山口 宏

調査指導 郡山遺跡指導委員会 (委員長 伊東信雄) 東北大学工学部 佐藤 巧

東北大学農学部 庄子貴雄・山田一郎 大分短期大学 佐々木 章

調査協力 国分尼寺住職 小枝仙涯

調査・整理参加者 浅理千賀・阿部 宏・阿部祐二・伊藤敦子・伊藤和枝・大崎れい子・

菊地 旭・菊地宣之・小池英子・郡山和子・小茄子川丈博・小林 充・昆野賢一・佐々木うめの・佐々木茂信・佐藤育弘・佐藤ちづ子・庄子信広・宍戸光枝

諫江 敏・鈴木 晴・高橋清子・高橋 博・高橋ヨシ子・千田あや子・千葉ヨシ子・富地晃裕・豊村幸宏・半沢後昭・藤本智彦・松崎哲示・松林四郎・真中

信三・森まきい・吉野たまこ・佐々田弥生・金沢君代・石井多賀子

本事業では、下記の9件について発掘調査を実施した。小規模な開発のため、ごく限られた調査区しか設定できなかったが、郡山遺跡の二期官衙の北辺、富沢水田遺跡の広がり、仙台城巽門の基礎地業について、一部確認され、5つの遺跡の範囲確認、性格究明の一助となった。今後は仙台市の北部、西部においてもこのような取組みを実施していく必要がある。

(佐藤 隆)

第1表 発掘調査実績表

地名 事項	富沢水田遺跡 (C-3-01)	山 口 遺 拝	仙 台 遺 跡	椎葉殿分屯寺跡 (C-4-2-0)	郡 山 遺 跡 (C-1-0-4)				
					第43次発掘調査	第45次発掘調査	第46次発掘調査	第47次発掘調査	第49次発掘調査
所 在 地	仙台市 泉町3丁目3番	高浜1丁目6番-8 15-20	川内新墓地	仙台町314-2	郡山6丁目 312-2	郡山5丁目 43-31, 43-7	郡山5丁目 348-10	郡山2丁目 11-16	郡山2、3丁目 地内
申請者住所	仙台市 泉町1丁目3-24	中江2丁目 15-20	博物館外溝工事 に先行する測量 と土壤試験調査	七地化有化に伴 う土壤試験調査	郡山2丁目 6-17	高松3丁目 13-2	荒町175	郡山2丁目4-1	24分町3丁目 7-1
申請者氏名	佐 竹 実 内	伊 藤 千 夫			高松3丁目 13-2				
調査内容	銀行支店建設	共同住宅新築			住 宅 施 工	住 宅 施 工	住 宅 施 工	住 宅 施 工	水道管理設工事
対象面積	208.7m ²	182.64m ²	—	170m ²	150m ²	220.71m ²	204.25m ²	306.07m ²	315m ²
調査面積	54m ²	33m ²	180m ²	89m ²	150m ²	40m ²	60m ²	50m ²	315m ²
調査期間	昭和59年 5月24日～6月20日	6月26日～7月5日	5月22日～7月11日 11月19日～12月24日	昭和60年 2月4日～2月15日	昭和59年 4月20日～4月28日	4月18日～4月25日	7月18日～8月25日	9月10日～9月17日	6月26日～8月13日

II. 発掘調査報告

〔1〕富沢水田遺跡(鳥居原・中谷地地区)

1. 調査に至る経過と目的

昭和58年9月20日付、佐竹栄吉氏より仙台市長町一丁目3番24号に銀行支店を建設する旨の発掘届が提出された。掘削は盛土内におさまるが、北方約100mに近接する高速鉄道の調査区では弥生時代水田が検出されているが西方約350mの中谷地地区で検出されていないので、その範囲確認調査を主要な目的として実施した。

2. 立地

当調査区は郡山低地西半部にひろがる後背湿地の最も低湿な地域にあたる。(松本秀明1981)

3. 層位

1層は現代水田の土壤、2層は中世期水田跡の作土である。3~30層は2.75mの層厚をもち未分解の植物(ヨシ等)を多量に含む泥炭質粘土層であり長期にわたる湿地の様相を示している。1~30層まで基本的に水平堆積であり、グリット6の南端では1~7層が南方へ上がっていく様相を示している。

註 庄子貞(東北大農学部教授)に3層~14層の植物遺体の鑑定をして頼んだところ、ほとんど各層ともヨシであった。

4. 遺構と遺物

(1) 2層上面一中世期水田跡

グリット1~2にかけて東西方向(真北より東に97°ふれる)畦を一本検出した。基底幅65~100cm、上端幅30cm前後、基底面(作土下面)からの最大高は12cmである。2層は作土と考えられ、畦と明瞭な土質の違いはない。畦北側の西すそ部には畦に沿って溝状の落込(深さ3cm前後)が検出された。畦中及び作土には灰白色火山灰粒(径1cm前後)が散在するが作土中より中世陶器片(宮城県内窯、東北窯産?)が出土しており中世期水田跡としておく。平安時代水田の作土を中世期に再び作土として利用した可能性がある。出土遺物はこの他作土中より土師器壺(栗~国分寺下層式)片が出土している。^註 北方約100mの調査区では中世陶器片と共に近世陶器片も出土しており水田跡の時期については注意を要する。『仙台市高速鉄道関係道路調査報告書』1984

(2) 3層上面一時期不明水田跡

中世水田跡畦南側直下で10cm前後重複して、ほぼ2層上面と同方向の畦を検出した。東側はとぎれおり水口の可能性がある。畦の基底幅は50~60cm、上端幅は20cm前後、基底面からの最大高は7cm前後である。2層上面の水田に伴う耕作により上部が削平された可能性がある。遺物は出土していない。年代は灰白色火山灰降下以前、10世紀前半以前としかいえない。ただし直上の2層上面確認水田跡作土中の土師器壺(栗~国分寺下層式)が、本来3層に属し、中世期水田の耕

作により中世期水田の作土に移動した可能性もあり今後の調査の検討課題である。

(3) 7 a 層上面一時期不明の畦状の盛りあがり(6 層上面で固化)

グリット 2 ~ 3 で東西方向(真北より東へ76°ふれる)の畦状のゆるやかな盛りあがりを検出した。基底幅 1 m 55 cm 前後、上端幅は 40 cm 前後と固化したが、断面形態では傾斜の変換点は不明瞭である。基底面からの高さ約 4 cm。出土遺物なし。年代は不明。北方約 100 m の弥生時代水田跡との対比が問題であり今後の検討課題である。

(4) その他の

この他明確な遺構としないものに、7 b 層上面検出の小溝、7 c 層上面調査区南端の「南南方へのゆるやかな上り」、8 層下部の溝状の落込がある。この中では 7 b 層上面の溝は、断面 U 字形で比較的整っており遺構の可能性があるがいずれも出土遺物なく年代不明である。(田中則和)



第2図 2層(中世期水田跡作土)出土遺物

[2] 山口遺跡

1. 調査に至る経過と目的

昭和59年4月13日付、伊藤幸夫氏より仙台市富沢一丁目10番8号に共同住宅を新築する旨の発掘届が提出された。掘削は盛土内におさまるが、山口遺跡は、仙台市体育館建設に伴う調査区の西方域については、遺跡の内容が不明であるため、範囲確認調査をすることとした。

2. 立地

当調査区は郡山低地西半部にひろがる後背湿地に属する。(松本秀明 1981を利用)

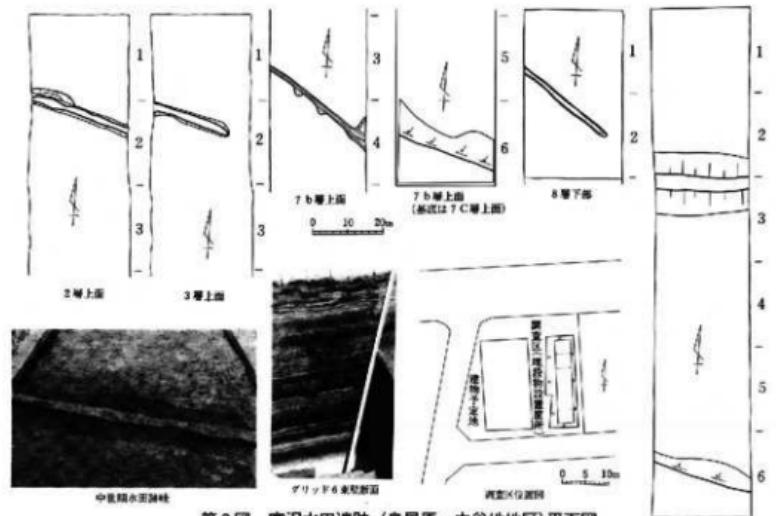
3. 層位

基本層位の1層は現代水田の土壤、4層は中世水田跡の作土である。5a、b層は平安時代の水田跡の作土と考えられる。

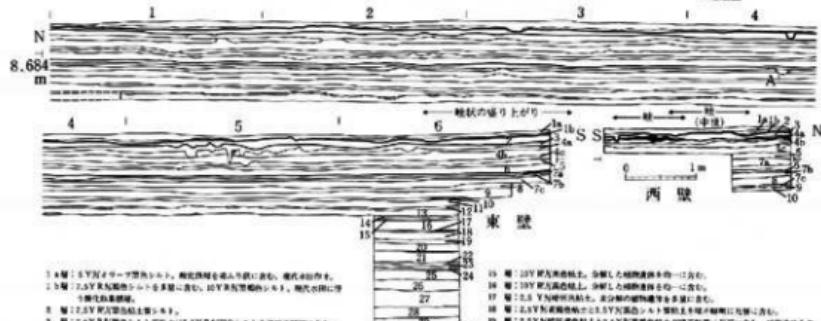
4. 発見遺構

(1) 4層上面—中世期水田跡

グリット 2、3 の境付近で南北方向(真北より東に 14° ふれる)の畦を検出した。基底幅 100 cm 前後、上端幅 40 cm 前後、西側基底面(作土下面)からの高さは、10 cm 前後である。作土は 4a 層と思われる。(3 層も可能性がある) 畦の東側では、4a 層は畦の東斜面に堆積しているのみであり土層観察から後世、作土が削平されている可能性がある。なお作土には、灰白色火山灰粒(径 1 cm 前後)が含まれており、下層の平安時代水田跡作土の上部を再び作土化していると



第3図 富沢水田遺跡(鳥居原・中谷地区)平面図



1. 壁: 3.5m厚オーバー層(砂質土). 植物層を含み砂に富む。成れ木作生す。
 2. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。10cm充満植物層シート。成れ木作生す。
 3. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 4. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。成れ木作生す。
 5. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 6. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。成れ木作生す。
 7. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 8. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 9. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 10. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 11. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 12. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 13. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 14. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 15. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 16. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 17. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 18. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 19. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 20. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 21. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 22. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 23. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 24. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 25. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 26. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 27. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 28. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 29. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 30. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 31. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 32. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 33. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 34. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。
 35. 壁: 2.5m厚粘土層シートを多量に含む。

第4図 富沢水田遺跡、鳥居原・中谷地区断面図

思われる。年代決定資料は、珪西側そ部4a層（作土）上部で出土した中世陶器片であり、13~14世紀の年代が考えられる。

(2) 5層上面—平安時代水田跡

中世期水田跡の珪直下に基底面で東に數10cmずれて南北方向（真北より東に5°前後ふれる、狭いトレンチのため、軸線方向は不明確である）の珪を検出した。基底幅120cm前後、上端45cm前後、西側基底面からの高さ12cm前後である。作土は5a及び5b層と考えられる。両層とも灰白色火山灰粒（径1cm前後）が散在する。5C'層は珪西側の不整溝状落込堆積土で5C層とほぼ同質であるが灰白色火山灰粒（径1cm前後）を若干含む点で異なる。不整溝状落込は、上端幅15~60cm、深さ10cm前後である。農耕具の耕起痕の可能性を含めてその性格については、今後の調査の検討課題である。年代は作土の下層には灰白色火山灰を含まないことから平安時代10世紀前半以降中世であり、上層中世期水田跡との関係から、10世紀前半頃の可能性が強い。なおグリット5~6、5b層上面では、失端が円形にふくらむ溝状落込（深さ1~3cm）が検出されたが性格は不明である。

(3) 7層上面—1号溝等

グリット5~6で1号溝を検出した。平面形はやや孤状で上端幅30~50cm、深さ10cm前後、堆積土は2層に分れ、上層の5b層に近似している。出土遺物なし。性格不明である。他に平面形、断面形共不整形で深さ5cm前後の落込あるが植物痕など自然の營為と考えられる。

(4) 8層上面—落込

グリット6で落込を1ヶ所検出した。南方へのびると思われる。出土遺物なし。性格不明である。

5. 遺物—中世陶器

4層（中世期水田跡作土）出土の中世陶器甕口縁部片は、酸化炎焼成の無釉陶器である。口縁部の特徴は受口を呈し胎土に石英粒や小白粒を霜ぶり状に含む点にある。このような特徴、特に胎土、焼成から、県内窯産と思われ、中でも白石市東北窯産のものに類似している。⁽¹⁾年代については、常滑窯のものとの類似性から鎌倉時代中後期13~14世紀前半と考えられている。⁽²⁾なお内外面に漆状のものに布が付着している。漆状のものは中世陶器の補修、接着に使われている例が多いが、本例は更に布で補強したものか、小片の為断定しがたい。⁽³⁾

註(1) 藤沼邦彦「宮城県出土の中世陶器について」P28~29『東北歴史資料館研究紀要第3巻』1978、藤沼氏郎教示。

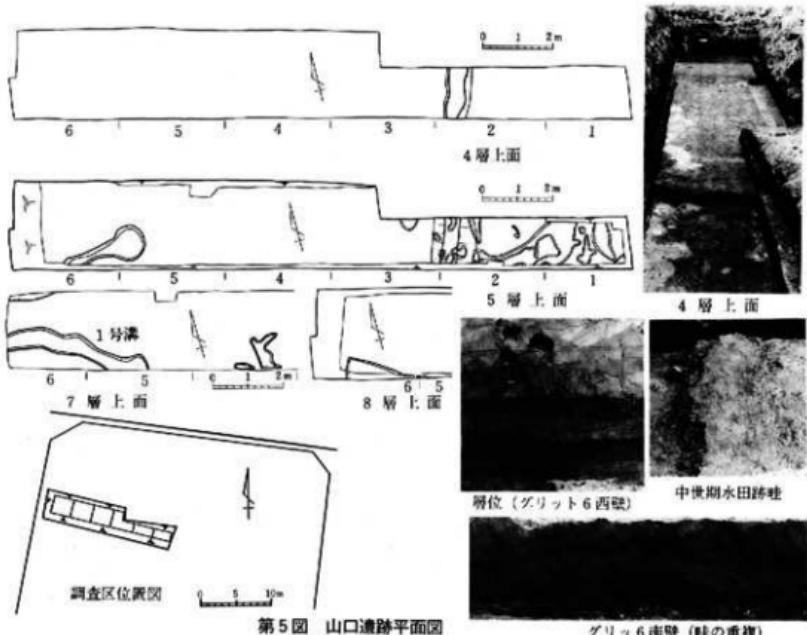
(2) (1) 及び藤沼邦彦「宮城県地方の中世陶器遺跡（予稿）」P44『東北歴史資料館研究紀要第3巻』1978

(3) 佐藤洋「今泉城跡」（仙台市第58集）P74 仙台市教育委員会 1984

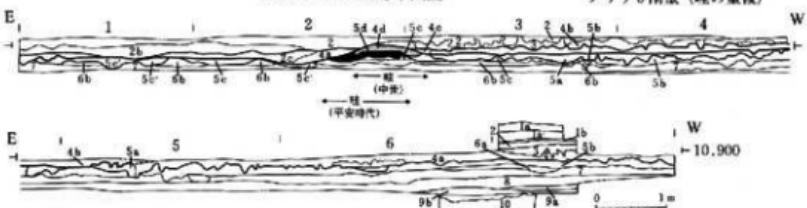
6. 富沢地区水田跡調査の検討課題（第8図）

(1) 中世期水田跡

今回の発掘調査で、その可能性あるものを含めて富沢水田跡内で鳥居原・中谷地区2ヶ所、⁽¹⁾泉崎前遺跡1ヶ所、山口遺跡で2ヶ所調査された。山口遺跡北半から富沢水田跡のほぼ東半



第5図 山口遺跡平面図



- 1層: 7.5YR 5/2灰色シルト。輪作耕種不耕作にまばらに含む。現代水田作土。
 1'a層: 7.5YR 5/2灰色シルト。輪作耕種不耕作にまばらに含む。現代水田作土。
 1'b層: 10YR 4/2褐色色シルト。腐化鉄風化帶。現代水田に伴う。
 2'a層: 10YR 4/2褐色色シルト質粘土。腐化鉄風化帶。1'a, 1'b層より多く含む。
 2'b層: 2.5YR 4/2褐色色シルト質粘土。
 2'c層: 2.5YR 4/2褐色色シルト質粘土。
 3'a層: 10YR 4/2褐色色シルト質粘土。4層に由来する粘土シルトが境不鮮明に位位に混入する。
 3'b層: 10YR 4/2褐色色シルト質粘土。4層が剥離され3層に油膜状に入り混った層。
 4'a層: 10YR 4/2褐色色粘土質粘土。5層に由来する上が境不鮮明に混入。
 4'b層: 10YR 4/2褐色色粘土質粘土。5層に由来する上が境不鮮明に混入。
 4'd層: 4'a層とは同じの上色土性を示すが、山形の盛りあがりから壁と考えられる。
 5'a層: 2.5YR 5/2黑色色シルト。
 5'b層: 5 YR 5/2褐色色シルト質粘土。
 5'c層: 5 YR 5/2褐色色粘土質粘土。
 5'd層: 2.5YR 5/2褐色色質粘土。山形の盛りあがりから壁と考えられる。
 6'a層: 5.0YR 4/2褐色色粘土質砂。10YR 4/2オリーブ黄色凝灰岩粉を含む。
 7'a層: 10YR 4/2褐色色シルト質粘土。輪作耕種を位位に含む。
 8'a層: 10YR 4/2褐色色粘土。
 9'a層: 10YR 4/2褐色色粘土シルト。
 9'b層: 10YR 4/2褐色色粘土質粘土。植物遺体を含む。
 10'a層: 7.5YR 5/2シルト質粘土。植物遺体を多く含む。腐化鉄風化帶を位位に含む。
 11'a層: 5.0YR 4/2オリーブ黄色シルト質粘土。

第6図 山口遺跡断面図

には中世期水田が広く分布していると考えられ、西半については、今後の検討課題である。いずれも後背湿地に属し泉崎前地区を除いて湿田である。いずれも小面積の調査のため、区画の形態などは不明な点が多い。畦の方向はほぼ真北もしくは直交するものが多いがかなりぶれているものもある。これらは下層に灰白色火山灰を指標とする平安時代水田跡があり（今回の富沢中谷地区は不明確）、中谷地地区（高速鉄道関連）、泉崎前地区では、平安時代の真北方向もしくは直交する畦と数10cmから数mの並行移動するものが多い。泉崎前遺跡では、黒褐色粘土におおわれているのにかかわらず位置的に重複している畦があり、「方向」が意識されていることが窺える。年代決定資料は各水田跡とも乏しいが山口遺跡では、今回13~14世紀の中世陶器片、前回、中世末を中心とする年代が考えられ、中世期水田の年代確定と細分と分布も今後の検討課題である。なお中世期名取川南岸の中田町字前沖所在の後河原遺跡でも調査されており、作土下面に鉄分集積層を乾田で畦の方向が真北より磁北に近いなど、富沢地区水田跡と様相を異にしており仙台平野の中世期の水田の利用形態を考える上で今後の検討課題である。

(2) 弥生時代の水田跡

富沢地区の後背湿地域の調査で弥生時代水田跡を検出していないのは、中谷地地区（高速鉄道関連）の調査区である。今回の調査区では、7a層上面の「畦状の盛りあがり」と7a層上面南端の南方への「ゆるやかな上がり」が認められた。北方約80mの高速鉄道関連調査区での水田跡の畦の方向は、真北より東に10~35°及び93~135°（130°前後主体）で、7a層上面のものについては合致せず、土層の様相も異なるので「畦」としての決定は保留しておきたい。中谷地地区は後背湿地の中でも最も低湿な地帯にあたるので、水田発生のプロセスを考える上で、広い調査区による分布の検討が必要である。

（田中則和）

註 (1) 今回の調査と高橋勝也「IV中谷地遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告』仙台市教育委員会 1983

(2) 工藤哲司「2・3層層出構造と出土遺物」『富沢水田遺跡第1番-泉崎前地区』仙台市教育委員会 1984

(3) 今回の調査と田中則和「(6)中世の水田跡」「山口遺跡II」仙台市教育委員会 1984

(4) (2)の「Ⅳ、調査成果のまとめと考察」では牛の足跡の深さから「極端な湿田ではなかった」とあり付録3では庄子真雄・山田一郎氏が直下層に鉄の集積層が存在していることを指摘されており、乾田に近い湿田もしくは、湿田に近い乾田とおもわれる。

(5) 荒井哲也「M・富沢水田遺跡(C-301) 烏居屋・中谷地地区一」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』1984にこれは、この調査では、中世陶器片と近世陶器片が出土しており、中世期水田跡の確定には、より広範囲かつ近現代による擾乱の現象による検討が必要である。

(6) 佐藤甲二・青沼一民「後河原遺跡」仙台市教育委員会 1984

(7) 高橋勝也「Ⅴ、中谷地遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告』仙台市教育委員会 1983

(8) 荒井哲也「M・富沢水田遺跡(C-301) 烏居屋・中谷地地区一」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』1984

参考文献：松本秀明「仙台平野の冲積層と後水期における海岸線の変化」『地理学評論』第52巻第2号 1981



第7図 中世期水田跡作土(第4層上部)出土遺物



河川名	山口(古次)	山口(4次)	高沢一帯時間	高沢一帯跡地	後河原
河	高沢川	高沢川-丁目10番	高沢川-丁目6番	高沢町高田4丁目の跡地	高沢町高田3丁目
地形区分	後河原地	後河原地	後河原地	後河原地	後河原地
標高	10.8 - 10.9m	11.6 - 11.7m	9.5 - 9.6m	10.8m	9.03 - 9.08m
標高差	第4河岸上部	第3河岸中	第3河岸上部	第2河岸上部	第3河岸上部
作土	10YR5R灰褐色 粘土質シルト (砂・粘土質含む)	10YR5R灰褐色 粘土質シルト (砂・粘土質含む)	10YR5R灰褐色 粘土質シルト (砂・粘土質含む)	7.5YR5R灰褐色 粘土質シルト (砂・粘土質含む)	10YR5R灰褐色 シルト質粘土 下層に泥炭層
地図、遺跡	高沢川 地図(1)	高沢川 地図(1)	高沢川 地図(1)	高沢川 地図(1)	高沢川 地図(1)
地の方向(風向より東)	N-14°-E後側	N-37°-E 用意地N-7°-E	高沢川N-97°-E 用意地N-7°-E	高沢川不規則であるが 用意地にはほぼ南北	N-97°-E前後
枚数	—	2	7	3	—
件数	—	2	7	3	12
平均標高	上層100 中層60 下層10	下層40-60 中層130 上層150	下層20 中層80 上層130	下層20 中層80 上層130	A: 120 B: 120 C: 50 D: 50 E: 120
地盤	不明	不明	不明	不明	地盤22m 高さ22m以上
水口	不通	不通	不通	あり(1)	なし
芋	不通	不通	あり(1)	不通	あり(3)
平安時代	・河原地で二 重防護柵がある 水田との關係	・河原地で二 重防護柵がある 水田との關係	・河原地で二 重防護柵がある 水田との關係	・河原地に束に3cm の土塁がある 水田との關係	・河原地は防護柵や水田と 水田との間に30cm離すれ る場合がある
跡地決定地點	山口跡(1点) (跡地はいずれも小)	山口跡(2点) (跡地はいずれも小)	山口跡(1点)	北・南跡(1点)	中・北跡(1点) (高さ40cm)
文書	本遺跡が年輪6 (新古石器) 1985	日・御物跡「山口裏 跡」1984	工務課同様「高沢水田 跡地(1点)」1984	古植物生残「高沢鉄道 跡地(1点)」1984	本書 高沢川上流「後河原 跡地」1984
図	K A	F G	I D	J	—

平安時代の水田跡 A, B, C, D, E, F, G, H, I, K, M, N (B, Hは2時間)

共生時代の水田跡 D, E, F, G, I

平安時代以前の水田跡 G, L

(文系) B, C, HはDに同じ。 G.H: 調査履歴仙台市高架鉄道開通調査報告書 1984

1: 田野裕志「(1) 富沢水田跡」『仙台平野の遺跡群』1984 M: 生藤裕「泉崎浜遺跡」『乍裂4』1984

L: 田中耕樹「24. その他の遺跡と遺物」『六反田遺跡発掘調査報告書』1981 N: 田中耕樹「平安時代の水田跡」「六反田遺跡Ⅱ」1984

註(1) 4番は東北大農業学部正賀雄教授の分析で後代鉄器類層であるが、3番との關係は不明確である。

(2) 畦の方向はK, Jのよう2小トレンチ剖面では、畦の「隅丸部」にあたった場合など不正確である。

第8図 富沢地区的水田跡(後河原遺跡を除く)

[3] 仙台城三ノ丸巽門跡

1. 遺跡の位置と環境

仙台城三ノ丸跡は、仙台市川内、仙台駅の西方約2kmの位置にあたり、青葉山丘陵の東端、広瀬川右岸の河岸段丘上を占め、巽門跡はその東南端を占める。

仙台城は、伊達氏17世（藩祖）政宗が、慶長5（1600）年、徳川家康の許可を得て普請の繩張りを行い、翌年普請を開始した。この城は、戦国期の山城から近世平城へと移行する過渡期にあたり、丘陵性台地面の本丸、下位段丘面の二ノ丸、三ノ丸、追廻馬場と原地形を利用し、立体的に構成されており、中世的な部分と近世的な部分とを併せもつ。

仙台城の跡地には、慶応4（1868）年の戊辰戦役の仙台藩降伏後、勤政庁、東北鎮台、仙台鎮台、そして陸軍第二師団がおかれ、太平洋戦争以後は進駐軍が駐留した。

仙台城の建物群は、造営後の度重なる火災や地震、もしくは戦災に遭い、または解体されており、現存するものはない。

2. 調査に至る経緯

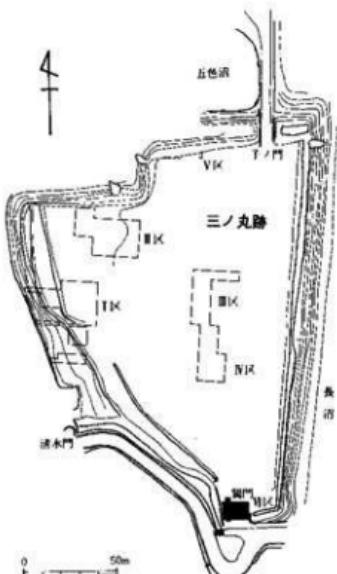
三ノ丸跡地は、昭和36年に仙台市博物館の建設がなされ、子ノ門石垣の修理、土塁の整備が行われた。

その後、博物館は3度にわたる増築をくりかえしてきたが、増大する収蔵物と展示機能面での不便さから、昭和57年9月の仙台市議会定例会において新博物館建設が議決され、翌年3月には仙台市博物館基本設計が完成した。

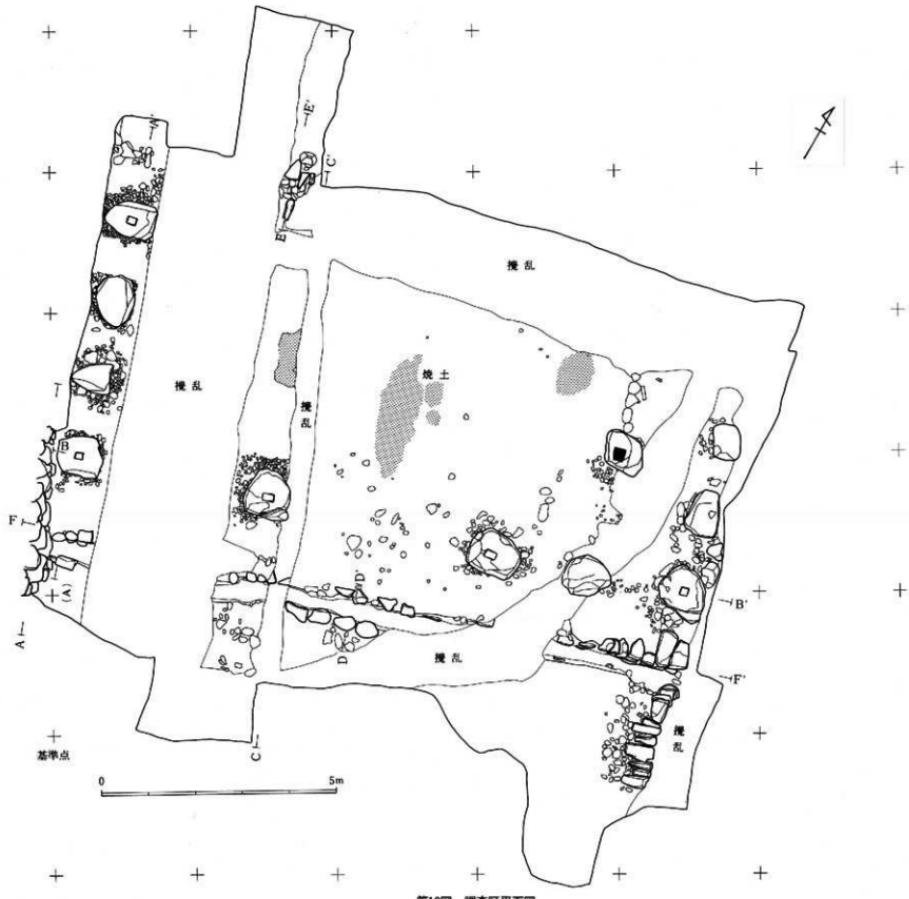
三ノ丸跡の調査は、旧博物館の建築において既に破壊されている部分を除外し、新館の建設予定範囲に調査区を設定し、旧館の解体の終了した昭和58年8月より開始し、同年12月まで行った。さらに設計変更による追加調査を翌年9月に実施した。

巽門跡の調査は、新館建設に伴う外構整備工事に先行し、戦災で焼失した巽門の構造を明らかにし、環境整備の資料を得る目的で、昭和59年5月17日に着手し、7月11日まで行った。

さらに、排水管工事で掘削を受ける部分に



第9図 調査区位置図



第10図 調査区平面図

ついて、同年11月19日から12月24日まで追加調査を実施した。

これまで、巽門の建築形状について論及したものには、昭和5年の大手門実測調査の報告書である、小倉強『仙台城の建築』がある。これは大手門に関する記述が主ではあるが、巽門についても実測成果および若干の見解を述べており、これによると、巽門の建築形状は、木造二階建、切妻屋根で棟瓦葺である。1階は43.61尺×17.14尺、2階は43.61尺×19.36尺、総素木造で正面の装飾金具は取剥がされている。規模は大手門より小さいが、間取りはほぼ同様である。懸魚、破風、火燈窓等の意匠的部分は大手門に比べてはるかに劣り、形態も異なる。用材は杉材を主とし、扉は椿である。建築年代は不明であるが、寛永の二ノ丸造営以後の感がある、としている。

また、東北大学建築学科佐藤巧教授が、旧伊達家の棟梁職にあった千田家所蔵の建築姿絵図を用い、「近世武士住宅」(昭和54年)および「仙台城の建築と姿絵図」(『東北大学建築学報第21号』、昭和56年)の中で考察を加えており、正保2(1645)年奥州仙台城下図および各時期の城郭図からみて、巽門等は二階建の櫓門形式に描かれており、この形式を幕末期まで踏襲していたとし、さらに規模、屋根形状は本丸中の門に近いことを指摘している。

3. 調査経過

調査はまず、地表面に表出していた4個の礎石を中心に、石垣、土壠にはさまれた約180m²に調査区を設定し、礎石まわりの表土を剥がし、焼土面までの深さを確認した。次いで、巽門南西にある境界杭を基準点とし、外構工事用に設置された巽門東側土壠上のT.14木杭とを結ぶラインを基準線(E-32°-S)とし、3mメッシュを配した。調査区は、前年に行われた二ノ丸跡発掘調査に引き続き、VI区と呼称した。

表土は重機を用いて掘削し、次いで人力で戦災による焼土を除去し、整地面上面で11個の礎石を検出した。西側礎石列については、北側に調査区を拡張し、さらに2個の礎石を検出した。また、東側礎石列については、擾乱土を掘り上げ、新たに北側で礎石を1個検出した。しかしながら、調査区内は、北西方向からの湧水を流す暗渠や水道管、排水管等によってかなりの掘削を受けており、遺構の遺存状況は惨憺たるものであった。

瓦や門扉・壁材等の炭化材を取り上げながら、焼土・炭を除去し、礎石基部の根石を検出した。さらに、調査区の中央部では整地面の下部にもう一面の整地面が存在することが判明した。上部と下部の整地面の間層は、レンガや漆喰を含む厚さ2cm前後の薄層が互層をなし、瓦の他、磁器や釘等の鉄製品を含んでいた。下部整地面の上面では、所々で瓦状に焼け面が観察でき、板ガラスの破片を多く出土した。

巽門の前面は、正面礎石列の南約1.5mに平行して並ぶ間知石列を検出したため、調査区を南側に5m幅で拡張し、擾乱部分を除き、上幅35~40cmの雨落溝を検出した。雨落溝の東端部で

は、雨水管工事の際に間知石の積み直しが行われている。

礎石西側梁列では、7個の礎石が並んで検出されたが、その中3個は基部に玉石をもたず、やや浮いた状態であったことから、チェーンブロックを用いて動かして下部を精査したところ、原位置を保つ礎石の脇に移設したものであることが判明した。また、南側桁列の礎石縦断エレベーションの検討により、正面東側2個の礎石は納穴底面のレベル高が20cm程低く、排水管工事の際に据え直していたことがわかった。正面中央東脇の礎石については、納穴の方向が桁列よりも南に偏れており、かつ礎石基部に融解したガラス片を敷いていることから、巽門の焼失以前に礎石位置がずれ、ガラス片が下に入りこんだものと考えられる。また、礎石西側梁列の北側1.2mでは雨落溝の底部玉石および縁石と考えられる切石を検出した。

現地説明会を開催し、造構の復元、環境整備に備え、造構上に山砂を20~40cmの厚さで敷いた上で土砂を埋め戻し、調査を終了した。

その後、營繕課と外構工事について打合せを重ねたが、博物館の排水管については巽門内部を横断せざるを得ないと見解が出され、新たに掘削を受ける幅1m×長さ10mのトレンチ2本について追加調査を行った。

その結果、内側桁列の北1.2m、中央通路部のやや西寄り、通路として調査区外としていた箇所で、辛うじて掘削をまぬがれた雨落溝を長さ60cmにわたって検出した。また、門の内側、通路部分、整地面の1層下面で、東西1.2m、南北0.8m以上の擾乱に切られる半円形のプランを検出した。堆積土には5~8cmの円礫を多量に含んでおり、数点の瓦片も出土した。プラン上面で径30×25cmの円礫を検出したが、礎石列とは組み合わず、かつ上面のレベルも20cm程低くその性格は不明である。

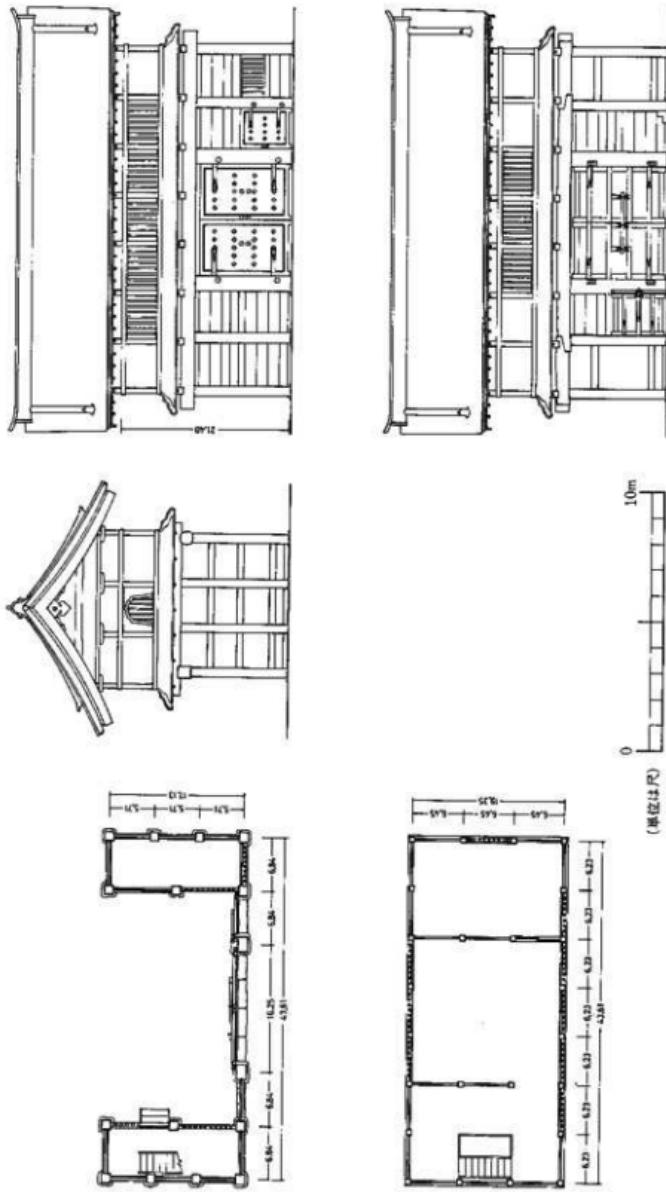
門の下部整地地業の断面図および周辺地形実測図を作成し、調査を完了した。

なお、昭和60年度から、外構工事に着手し、その際、巽門跡の環境整備も行われる予定である。

4. 調査概要

巽門跡の発掘調査の詳細については、仙台市文化財調査報告書第76集「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」に記述し、本報告書では概要にとどめる。

〈磁石配置〉 巽門は、三ノ丸の周囲をめぐる土塁、石垣で構成された枠形に南面して建つ。現存する礎石配置から、正面の桁行5間、総長13.06m、西側梁行3間、総長5.12mの東西棟建物である。梁行列方向はN-32°-E、各梁間は芯々で168~172cm、正面中央間は芯々で496cm、東側脇間は198、206cmであるが、調査の結果、正面桁列の東側3個の礎石(No. 9・10・13)は原位置を保っておらず、その礎石間寸法は参考にならない。東側梁列については、3個の礎石(No. 13・14・15)を検出しているが、原位置から動かされており、原寸法を示さない。西側梁行列上で検出した7個の礎石の中の3個も同様である。



第11図 聰門実測図（小倉塙 1930・佐藤巧 1985 原図）

(礎 石) 検出した14個の礎石は、火を受けて欠損しているものもあるが、一辺が60~130cmの不整形で、厚さは30~60cmであり、材質は安山岩質である。中、6個の礎石には、一辺が14~16cm×18~25cm、深さ6~10cmの長方形の納穴が穿たれており、門の四隅および正面桁列中央両側の位置に配されていたと推定できる。

註) 紹石No.10については、裏面が上に向かっている可能性があったので、下面を調べた結果、納穴はなく、欠失している紹石No.5も同様と考えられる。また、昭和5年の実測調査で存在の明らかになっている紹石No.7・12の位置については紹石を検出せず、納穴の有無については不明である。

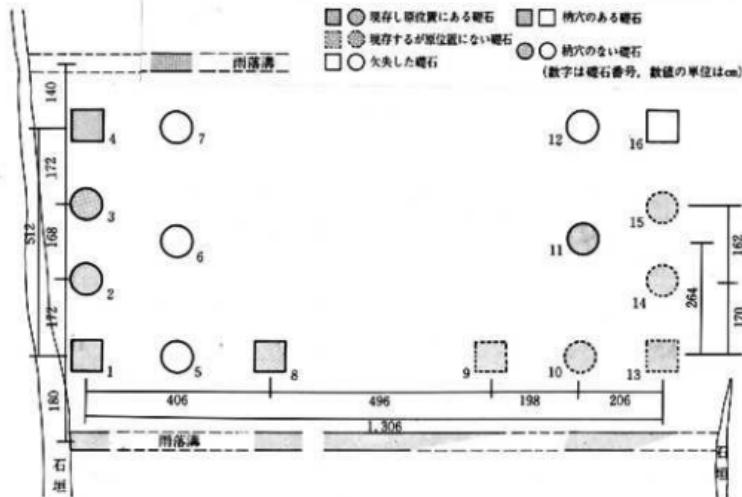
また、紹石No.11の上面では、30×27cmの長方形の焼失痕が認められ、柱材の痕跡と考えられる。

紹石No.11から紹石No.12の方向にむけ、直径15~30cmの人頭大の丸石を5個、すき間なく一列に並んで検出しており、布石の役目を果していたと考えられる。

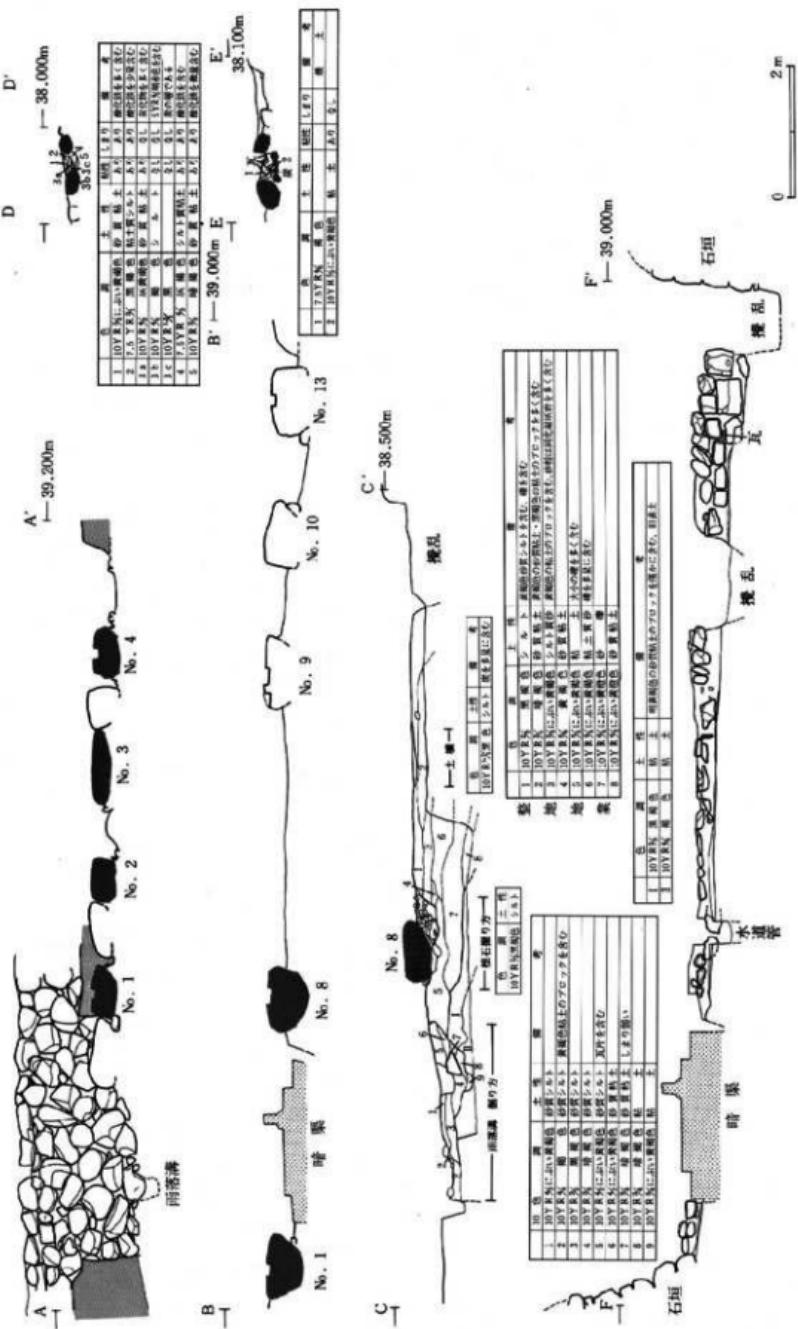
紹石は、おののその周囲5~40cm程の範囲で、深さ40cm程土壇状に掘り凹め、直径5~15cm大の円碟を黒褐色シルトとともに詰める、玉石地業をその下部に行っている。

(整地地業) 門の建つ部分は、三ノ丸内部から門の外側へと緩やかに傾斜しており、固くしまっている。この整地層は、黒褐色粘土の旧表土ないしは褐色粘土の地山土の上面に、旧地形にしたがい、検出面からの厚さで10~100cm程にぶい黄褐色ないしは褐色系の礫混じりの砂質粘土を積み上げたものである。

(雨落溝) 門の南側では正面桁列の全幅にわたり、北側では中央通路部の西側で一部を検出した。南側の溝は、桁列から芯々で180~200cm離れ、縁石に間知石もしくは渠石を用いている。西側では1段、東側では2段積みとなっており、石積みの間および掘り方埋め土には瓦片



第12図 紹石配置模式図



第13図 磨石列縫断面・調査区断面図・雨落溝断面図・雨落溝断面図

が含まれている。東端部では雨水管布設により破壊されているが、その一部は積み直されている。門の焼失後に礫混じりの黄褐色砂質粘土で整地されており、この整地層の下部で溝跡を検出した。溝は、上端幅35~40cm、深さ10~30cm、断面形はU字形ないしは逆台形を呈し、堆積土には炭・焼土を含み、所々でレンズ状を呈す。底面には砂が堆積し、瓦、鉄製品等の遺物を含む。内側の溝は、北側梁列の北1.4m、中央通路部のやや西寄りで、掘削をまぬがれた長さ60cmを検出した。間知石を縁石とし、上端幅45cm、深さ25cmで、底面には径10cm前後の玉石を敷きつめている。堆積土には多量の炭・焼土・瓦を含み、底面には砂が堆積している。また、西側梁列の北、この雨落溝の想定ライン付近には、切石や玉石がまとまって出土した。縁石は原位置を保ってはいないが、雨落溝に用いられた石材と考えられ、玉石は溝の底面の敷石と考えられる。

雨落溝は、門の基礎となる整地地業の後、溝の前後を掘り凹めて間知石を設置し、砂質シルトないし粘土を埋めて整地し、造りあげている。

〈土 壤〉 門内側の通路部分、整地面の1層下而で、東西1.2m、南北0.8m以上の、擾乱に切られた半円形のプランを検出した。堆積土には5~8cmの円礫を多量に含んでおり、数点の瓦片も出土した。プラン上面中央では、径30×25cmの円礫を検出したが、礫石列には並ばず、かつその上面レベル高も20cm程低く、その性格は不明である。

〈出土遺物〉 出土した遺物には、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、木製品、金属製品、その他がある。

陶器は、蓋、皿、碗、天目茶碗、急須、土瓶、行平、鉢、徳利、油壺、擂鉢、壺、甕、七輪などを出土し、その産地も、唐津、瀬戸、美濃、相馬、会津、平清水、堤、と多地にわたり、17世紀後半から20世紀にまたがるものである。161点の破片が出土し、そのうち18点を図化した。

磁器は、白磁、青磁、染付、青釉、色絵、赤絵などがあり、蓋、皿、碗、鉢、徳利、瓶、火鉢などの器種が出土している。産地も、中國産のものや、国内産では肥前、瀬戸、会津、切込と多地にわたり、16世紀末から20世紀にまたがるものである。133点の破片が出土し、そのうち17点を図化した。

土師質土器は、灯明皿などの器種があり、破片を10点出土したが、図化できたものはない。

瓦質土器は、12点の破片資料を出土し2点を図化した。

瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、半瓦、丸瓦、軒棧瓦、棧瓦、崩瓦、駒巴、冠瓦、棟込瓦などで、収納用コンテナにして10箱分を出土した。

軒丸瓦には、瓦当文様で分類すると、九曜文、三ツ引両文、巴文の3種があり、巴文には外区に連珠を伴うものもある。

軒平瓦と考えられる破片は、三ノ丸跡調査の際に出土した、瓦当文様が均整唐草文で中央花

弁が「桔梗文」の1点だけである。

平瓦は、破片資料が多く、寸法のわかる資料は5点しかない。幅24.5cm×長さ28.0cm×厚さ1.9cmのものと、幅23.5cm×長さ26.5cm×厚さ1.9cm程の正方形に近い全形の2種がある。

丸瓦は、破片資料のみであり、全体の寸法のわかる資料はない。

軒棟瓦は、小巴の種類でみると、巴、石持、万十の3種がある。垂れ部の文様は、均整唐草文で中央花弁が「三枚笹」と三ツ引両文の2種に分けられるものと、無文のものとがある。垂れの端部に丸切刻印のある破片も出土している。

その他、各種の瓦片を出土したが、破片資料のみである。

木製品は、焼失した門扉・柱などの板・柱材を出土したが、遺存状態が悪かったため図化したものはない。

金属製品は、建築用品、生活用品、古銭、その他を出土した。

建築用品としては、釘、装飾金具、その他がある。

生活用品としては、火箸、把手、その他がある。

古銭は3枚出土しており、寛永通寶2点、文久永寶1点である。

その他、布、骨片、櫛などを出土している。

5. まとめ

今回の調査結果から次のことが判明した。

1. 畿門の礎石14個を検出し、その中の6個は原位置を保っている。

2. 畿門の正面（南側）および背面（北側）で雨落溝を検出した。この雨落溝は、門の整地面を切って造られている。

3. 畿門の焼失は、昭和20年の1回で、建物は正面（南側）から背面（北側）にむけて倒壊している。焼失後に盛土・整地を行って、雨落溝などの遺構を埋めている。

4. 出土遺物の年代は、最古のものは16世紀末～17世紀前半にまで遡るが、その点数はわずかであり、殆どのものが幕末以降の遺物であり、畿門創建の時期を裏付ける資料は出土しなかった。

5. 出土した瓦には、本葺型（本瓦）と日本型（棟瓦）とがある。棟瓦葺き以前に本瓦葺きであったことも考えられ、葺き替え、修理が行われた可能性もあり得る。

（金森安孝）

参考文献

小倉 強 「仙台城の建築」 仙台高等工業学校 1930

仙台市文化財保護委員会編 「仙台城」 仙台市教育委員会 1967

佐藤 巧 「仙台城の建築と姿絵図」 「東北大大学建築学報 第21号」 1981

同 「旧仙台城大手門の建築について」 「旧仙台城大手門研究調査資料」

仙台市経済局商工部観光課 1983

玉置豊次郎監修 坪井利弘 「日本の瓦屋根」 1980



調査区全景(南より)



西側梁列礎石
根石・雨落溝底部
玉石検出状況
(北より)

礎石玉石地業断面
(東より)



整地面および雨落溝
検出状況 (西より)



北側雨落溝全景
(東より)



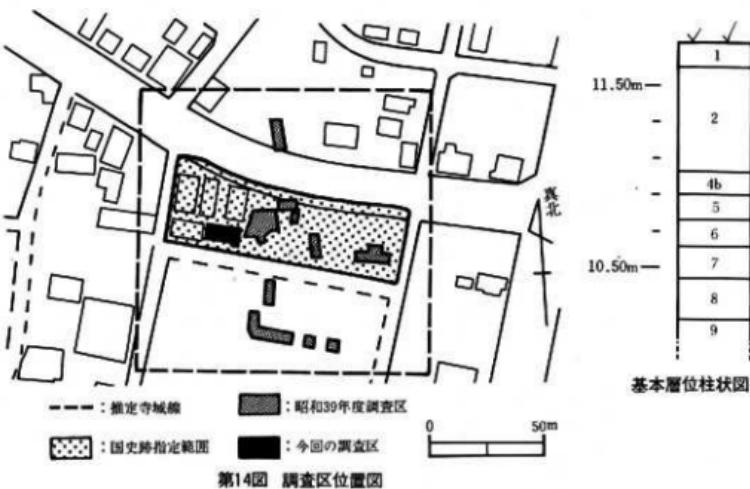
[4] 陸奥国分尼寺跡

1. 遺跡の位置と環境

陸奥国分寺跡は仙台市のほぼ中央部仙台市白萩町、宮千代1丁目に所在する。この地点は、東北本線仙台駅の東南東約2.5km、陸奥国分寺跡の東約600mの位置である。標高は11~12mである。^(註1)立地をみると宮城野海岸平野の西端部にある。また、長町一利府線が陸奥国分寺跡のすぐ西側を、東北から南北方向に走り、仙台市街台地と沖積平野を分けている。このため、陸奥国分寺跡と陸奥国分尼寺跡の背後には西方から北方にかけて比高差約10~15mの仙台市街台地を控えることになり、特に前者においてその観が強い。周辺の遺跡では北方約3kmに台原・小田原窯跡群がある。これらの窯跡群は、陸奥国分寺跡・同国分尼寺跡に瓦を供給していたことが明らかとなっている。

2. 調査に至る経過

本遺跡は、古くから現在の国分尼寺寺地内、及びその周辺に古瓦が散布していたこと、礎石の残る觀音塚があったことなどから、^(註2)陸奥国分尼寺跡であると言われていた。昭和23年に国指定史定史跡となり、昭和39年に觀音塚を中心とした発掘調査が行われ、觀音塚は陸奥国分尼寺の金堂跡であると推定された。^(註3)この調査成果に基づき、昭和43年には推定金堂跡の環境整備が行われた。今回の調査は、環境整備地西隣の土地を、昭和58年度に仙台市が公有地化したことによる遺構確認調査である。調査地点は、仙台市白萩町314-2である。



3. 基本層位

基本層位は1層から9層まで、細分層を含めると15層確認された。1層は表土、2層は旧耕作土である。3a層は北壁中央部付近にのみ分布する。4a層は調査区東部にのみ分布する。この4a層は火山灰である4b層を母材とする腐植土層であり、北壁・東壁際以外の部分で幾分耕作による擾乱を受けている。4a層と上下関係にある。3b層は4b層、5層がある程度の耕作による擾乱を受けた層であり、4a層と上下関係をもたない。4b層は北壁際および4a層下に分布しており、火山灰層である。5層以下の層は沖積作用により形成された層である。尚、4a層、4b層・5層・SX-4埋土③層を東北大学農学部山田一郎氏・庄子貞雄氏に依頼し、これらの土壤を分析していただいた。結果は30頁の通りである。

4. 発見遺構

遺構の検出は1層、2層、3a層を除去したのち行なった。検出面となったのは3b層・4a層・4b層・5層の上面である。溝跡1条(SD-1)、土壤1基(SK-1)、性格不明遺構5基(SX-1~5)が検出された。また、北東部北壁際の4a層の上に4a層・4b層・5層の混合土であるA層が確認された。

- (1) SD-1：調査区南半を東西に走る。中央部での幅は70~110cmであるが、東西両端では226cm、277cmと幅が広い。堆積土上面から瓦片が出土している。堆積土は基本層2a層~2e層から成る暗褐色シルトである。
- (2) SK-1：調査区中央部で検出された。SD-1を切っている。東西幅1.50m・南北幅0.96mの楕円形の土壤である。
- (3) SX-1：調査区西北コーナーで検出された。全体の規模は不明であるが東西2.73m以上、南北2.47m以上を計り、平面形は略円形を呈すると考えられる。SX-1の周辺及びその上面から瓦片が多く出土していることから、瓦溜めと考えられる。堆積土は3層確認されたが、②層は灰白色火山灰を多量に含む層である。堆積土上面には焼土が部分的に見られる。
- (4) SX-2：調査区南西部南壁際で検出された。平面形は67cm×38cmの不整楕円形である。
- (5) SX-3：調査区東部東壁際の4a層上面で検出された。全体の規模は不明であるが東西1.16m以上、南北1.69mを計り、平面形は方形あるいは長方形を呈すると考えられる。東壁際の擾乱部分の壁面から、埋土が互層を成すことが確認された。
- (6) SX-4：調査区南東コーナー付近でSD-1の堆積土を掘り上げた段階で検出された。全体の規模はSX-3と同様に不明であるが東西0.79m以上、南北1.77mを計り、平面形は方形あるいは長方形を呈すると考えられる。東壁際を一部掘り上げた結果、深さ51cm、壁はほぼ垂直に立ち上がり、埋土は一部木の根の擾乱を受けているが、互層を成すことが確認された。これら埋土の中で③層の土壤分析を行なったところ、4a層・4b層・5層から成ることが判

明した。

のことから、SX-4は4a層上面あるいはそれより上方より掘り込まれ、掘り上げた土を混合土として何回かに分けて埋めたものと考えられる。埋土中からは瓦片1点が出土している。

(7) SX-5：調査区北東部に長さ3.7m、幅30cmでAトレンチを設定し、4a層及び一部A層を掘り上げ、4b層上面の精査を行なった結果、SX-5を確認した。全体の規模は不明であるが東西幅47~58cm、深さ13cmを計る。堆積土は1層で、極暗褐色粘土から成る。溝跡の可能性がある。

(8) Bトレンチ：調査区中央に3b層、4b層、5層の関係をとらえるため、東西45cm、南北6.2mのトレンチを設定した。

これらの発見遺構の中で陸奥国分尼寺跡に伴なうと考えられる遺構は、SX-1~4である。この中でSX-3・SX-4は南北幅がほぼ同一で、西辺も共に真北方向とほぼ一致する。また、SX-4の堆土が瓦層をなしており、SX-3においても搅乱部分の壁面観察により、同様の状況が確認された。

5. 出土遺物

出土遺物は瓦類が最も多く104点を数える。内訳は、重弁蓮華文軒丸瓦片1点、平瓦片86点、丸瓦片17点、不明瓦片1点であるが、全て小破片である。その他に、土師器片12点、須恵器片1点、陶器片2点が出土しているが図化したものは1点もない。

6. まとめと今後の課題

今回の調査により確認された陸奥国分尼寺跡に伴う遺構はSX-1~4である。中でもSX-3とSX-4は掘立柱建物跡の柱穴あるいは礎石立ち建物の基礎事業の跡と考えられるが、建物跡の全容を把握するまでには至らなかったため、SXの記号により遺構を示した。調査区北東部に分布するA層は人為的な層であり、4a層上面にのっている。4a層の分布範囲は調査区東部であり、その西辺はおおよそ真北方向を示している。これらのことから、SX-3とSX-4に伴う建物跡の存在が考えられ、その性格の解明とともに、推定金堂跡との関係を究明する必要がある。また、A層は基壇の積土と考えられ、4a層の分布範囲は基壇規模を示す可能性もあり、今後の課題とされる。

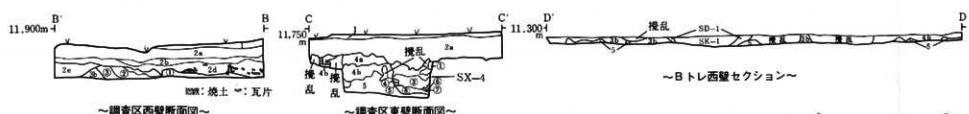
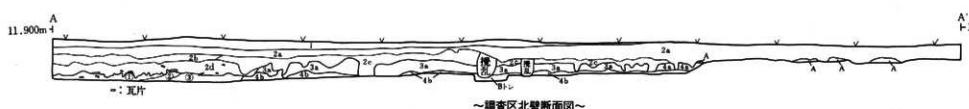
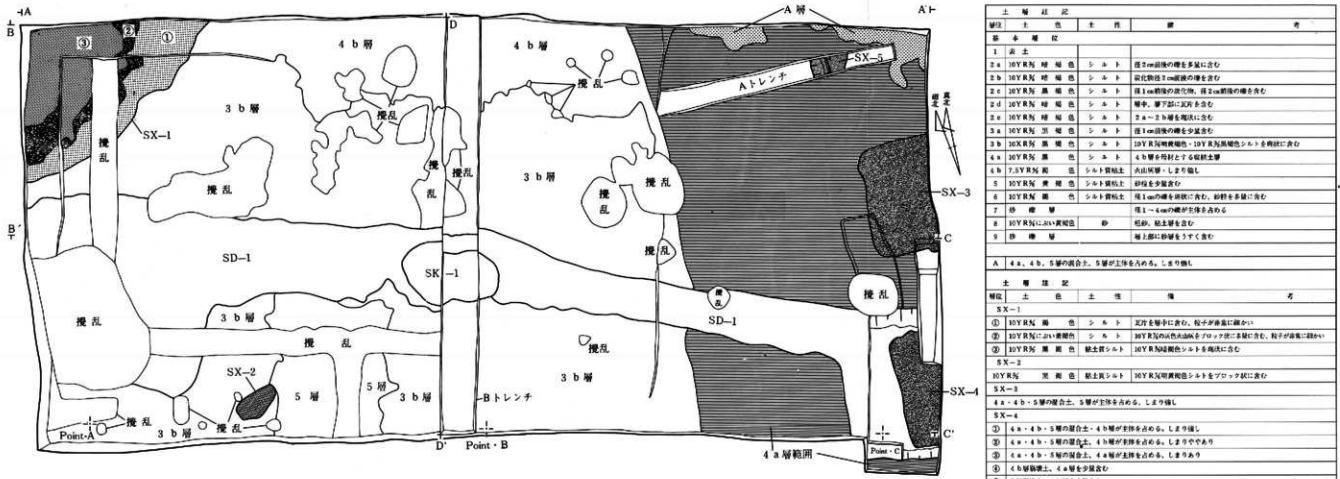
(斎野裕彦・渡辺 誠)

註1. 地団研仙台支部編 1980「新編仙台の地字」

註2. 中田他 1976「仙台平野西縁、長町一利府線に沿う新潟地質変動」『東北地学』第28巻 第2号 P111~P120

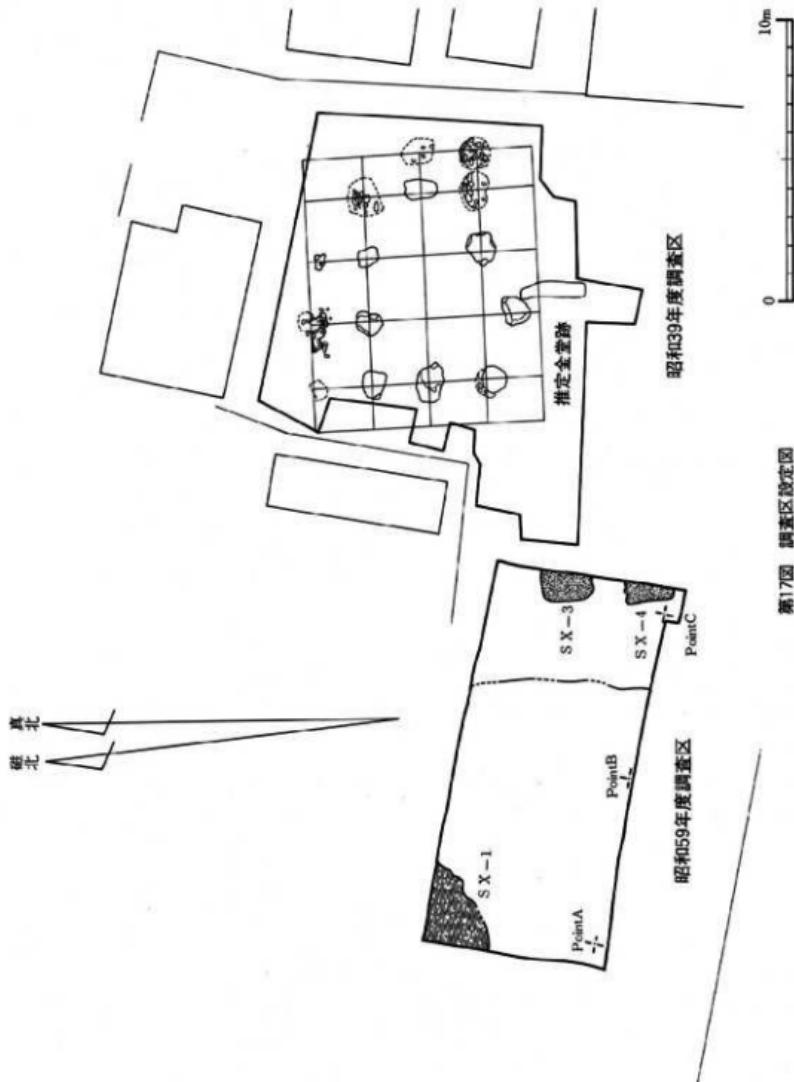
註3. 松本・内藤 1938「陸奥國分寺」角田文術編『開分寺の研究』

註4. 伊東・工藤 1969「陸奥國分寺跡調査報告書」『史跡陸奥國分尼寺跡環境整備並びに調査報告書』仙台市教育委員会文化財調査報告書第4集



第16図 調査区断面図

0 2 m



第17図 調査区設立図



図版 1
遺構検出状況



図版 2
SX-3・4 検出状況



図版 3
調査区東壁
セクション



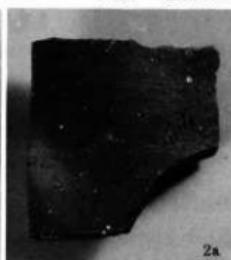
図版4 Aトレ東側断面



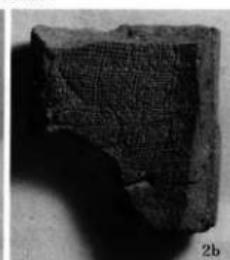
図版5 濁乱内土層断面



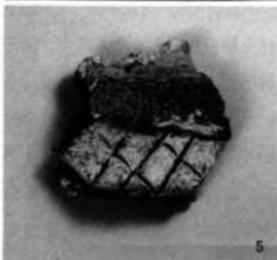
1



2a



2b



5



3a



3b

1. 重弁蓮華文軒丸瓦

2a. 不明瓦

2b.

3a. 丸瓦

3b. 丸瓦

4a. 丸瓦

4b.

5. 平瓦



4a



4b

陸奥国分尼寺跡の土壤

東北大学農学部 庄子 貞雄

山田 一郎

1) 4 b, 5 層は火山灰かどうかについて

4 b, 5 層が火山灰かどうかについて、リン酸吸着率と一次鉱物組成から検討してみた。リン酸吸着率は、リン酸の希薄溶液と土壤とを反応させ、火山灰土壤ではリン酸の85%以上が吸収される。本土壤での4 b 層のリン酸吸着率の割合が96%、5 層が49%であることから、4 b 層は明らかに火山灰土壤である。一方5 層は49%と低く、火山灰土壤ではない。ただし一次鉱物中に火山ガラスが少量含まれることからみて火山灰も少しは混じっている。また、重鉱物含量が4 b 層は5 %であるのに対し、5 層は1 %となっている。その内容は、重鉱物部分が4 b 層は磁鉄鉱+シソ輝石+角閃石であるが、5 層は磁鉄鉱>シソ輝石>角閃石であり、明らかに母材が異なる。粒度組成は4 b 層が軽植土であるのに対し、5 層は重植土で粘土含量が高く、このことも4 b 層は5 層の腐植層でないことを示している。

2) 4 a 層について

一部の断面では4 b 層の上位に黒色の強い4 a 層が認められる。この4 a 層と4 b 層との関係について検討してみる。一次鉱物組成は成は兩土壤とも重鉱物含量が5 %、その内容は磁鉄鉱、シソ輝石角閃石から成り母材的にみて同一であると考えられる。また、4 a 層の土色は7.5 YR 5/6と4 b 層の7.5 YR 5/6よりも黒味が強く、腐植の含量の違いを反映している。このことからみて、自然状態では上位より4 a 層、4 b 層、5 層の順であったものが、何らかの原因により4 a 層が除かれたため現在は4 a 層、5 層の層位が広く分布していると考えられる。

3) SX-4 埋土③層について

③層の一次鉱物組成は4 b 層（または4 a 層）と同じであることから、③層は下層の5 層が混合した土と考えられる。

陸奥国分尼寺跡土壤の性質 1)

	土色	腐植	上性	重鉱物(粒数%)				軽鉱物(粒数%)				重鉱物含量 (重量%)	リン酸吸着率 (%)
				Ily	Au	Ho	Op	Po	Qz	Vg	Mica		
4 b 層	7.5 YR 5/6	富む —含む	軽植土	32	3	31	34	17	5	6	—	72	5 96
5 層	10 YR 5/6		重植土	14	0	5	38	5	8	4	1	83	1 49
4 a 層	10 YR 5/6	非常に 富む	軽植土	31	2	21	47	—	n.d.	—	—	5	— n.d. —
SX-4 ③層	10 YR 5/6 10 YR 5/6	富む	重植土	26	1	28	45	—	n.d.	—	—	4	— n.d. —

1) : 一次鉱物組成は0.1~0.3mm部分で検討。重鉱物と軽鉱物は比重2.96で分離。

2) : Ily: シソ輝石, Au: 菱錫輝石, Ho: 角閃石, Op: 磁鐵鉱, Po: 斜長石, Qz: 石英, Vg: 無色火山ガラス, Mica: 長石, Wp: 風化粒。

[5] 郡山遺跡

1. 遺跡の位置と環境

郡山遺跡は仙台市郡山二~六丁目に及び、西は東北本線から東は仙台バイパスまで、南は諏訪神社から北は八本松との境界まで、東西800m、南北900mの広がりが考えられる。この中で、推定方四町外郭線の官術ブロックは中央北寄りの一角を占めている。

遺跡の北側は広瀬川が形成した標高10~12mの自然堤防で、南につれて低くなり、標高6~8mの名取川の氾濫原へと移行する北高南低の土地である。

遺跡の周辺には、北西部に縄文・弥生土器を出土する西台畠遺跡、南方部に的場・竪ノ瀬遺跡、南東部に矢来・欠ノ上Ⅰ・欠ノ上Ⅱ・欠ノ上Ⅲ遺跡がある。また東部には、15世紀に栗野大善が居館とし、後に伊達政宗が居城とした北目城跡がある。さらに周辺には、14世紀初めの古碑群が点在しており、先史時代から古代・中世・近世を経て現在まで連綿と文化が受け継がれてきた地域であるといえる。

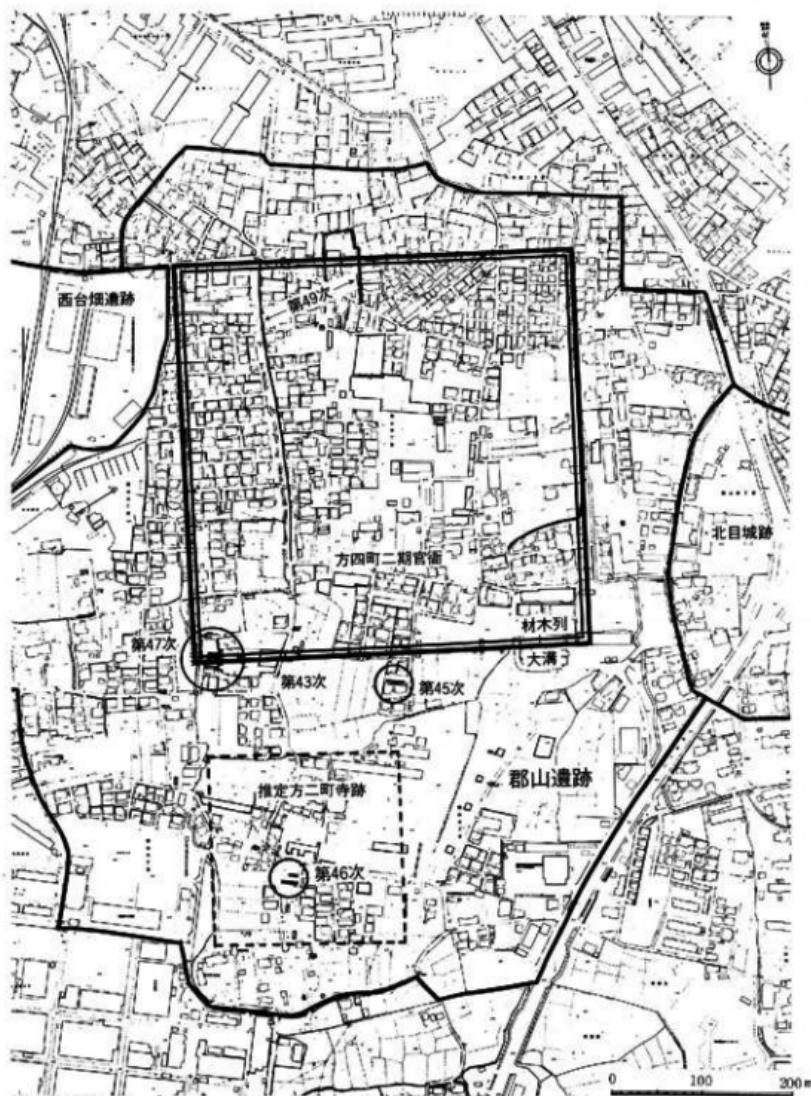
2. 調査概要

郡山遺跡の発掘調査の詳細については、仙台市文化財調査報告書第74集「郡山遺跡V—昭和59年度発掘調査概報」に記述し、本報告書では概要にとどめる。

(1) 第43次調査：第43次調査区は推定方四町官術の外郭南辺にあたり、外郭南西コーナーに近い第7次・42次調査区に隣接する地区である。この地区で、外郭南辺上に住宅建築に伴う発掘屈が提出されたことから、申請者菊地彦三郎氏と協議の結果、住宅が外郭線上に重ならない様、設計変更していただくことになり、外郭部分については緊急調査を実施した。調査の結果推定線上で外郭の材木列ならびに大溝を検出した。材木列は材の遺存状況が良好で、延長12mの調査区の中に布振りを伴って40本の材が密接して列をなすことを確認した。大溝の状況も過去に実施した第4次・7次・42次調査と同様の結果が得られた。また、材木列に切られるⅠ期官術を構成すると考えられる掘立柱建物跡を1棟検出し、Ⅰ期・Ⅱ期の変遷を確認した。

(2) 第45次調査：第45次調査区は推定方四町官術と推定方二町寺院の中間にあたり、官術の中軸延長線上に位置しており、官術と寺院を結ぶ道路遺構の存在が想定される地区である。この地区で、住宅建築に伴う発掘屈が提出されたことから、緊急調査を実施した。深さ1.5m程の盛土の下層に旧水田を確認し、水田下層で南北方向の溝跡を1条検出したのみで、道路遺構を確認することができなかった。

(3) 第46次調査：第46次調査区は推定方二町寺域のほぼ中央地区に位置し、56年度に調査し、版築基壇を検出した第12次調査区の真南にあたる。当初第45次調査として実施する予定であったが、緊急調査として前述の第45次調査を実施したので、この調査は第46次となった。擾乱が著しく、調査区も極めて狭かったことからも、寺院を構成したと考えられる遺構は検出され



第18図 調査区位置図

なかった。しかし、上層の擾乱層中からは多量の瓦類が出土し、付近に瓦葺き建物が存在していたことをあらためて裏付けることとなった。

(4) 第47次調査：第47次調査区は推定方四町官衙外郭の西辺にあたり、55年度に実施した外郭南西コーナーの第7次調査区の北側に隣接する地区である。この地区で、住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、申請者赤井沢正敏氏と協議の結果、住宅は西辺外郭大溝の西側（官衙外郭側）へ建築する様に設計変更、また、外郭材木列にかかる轍の改修ならびに架橋は中止し、仮架橋とすることを瞭解いただき、外郭大溝部分については緊急調査を実施した。調査の結果推定線上で外郭の大溝を検出した。敷地内は1.5m程の盛土がなされ、遺構は全く破壊されないこととなった。

(5) 第49次調査：第49次調査区は推定方四町官衙の西ノ町を南北に通る線に推定北辺を二度にわたって横断するコの字線の水道本管施設工事に伴う調査区で、両線あわせて総延長450mに及ぶものであるが、掘削幅が70cmと狭く、殆んど擾乱層の中に新管が入る様、掘削時にチエックし、隨時、新管を曲げていく工法をとった。一部、土壤や柱穴を検出した。推定北辺上では一方の横断箇所で推定線より約4m南の位置で大溝と材木列の痕跡を確認した。

（金森安孝）

職 員 錄

社会教育課

文化財調査係

課長	阿部 達	係長	佐藤 隆	主事	吉岡泰平
主幹	早坂春一	主事	田中 則和	・	工藤哲司
		・	結城 慎一	・	渡部弘美
		教諭	菅原 和夫	教諭	渡辺 誠
		主事	木村 浩二	主事	主浜光朗
係長	佐藤政美	・	篠原 信彦	・	斎野裕彦
主事	岩沢克輔	教諭	小野寺和幸	・	長島栄一
・	山口 宏	・	佐藤美智雄	・	及川 格
		主事	佐藤 洋	教諭	千葉 仁
		・	金森 安孝	・	松本清一
		・	佐藤 甲二	派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物露屋下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
 第2集 仙台城（昭和42年3月）
 第3集 仙台市燕沢善心寺横六古墳群調査報告書（昭和43年3月）
 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
 第5集 仙台市南小泉法領塙古墳調査報告書（昭和47年8月）
 第6集 仙台市荒巻五本松古跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
 第7集 仙台市高伏裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
 第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
 第10集 仙台市中町田安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
 第11集 史跡遠見塙古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
 第12集 史跡遠見塙古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
 第13集 南小泉遺跡一括認定調査報告書（昭和53年3月）
 第14集 栗連遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
 第15集 史跡遠見塙古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
 第17集 北星軒遺跡（昭和54年3月）
 第18集 江江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
 第20集 史跡遠見塙古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
 第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
 第22集 縦ヶ崎（昭和55年3月）
 第23集 年報1（昭和55年3月）
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
 第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
 第26集 史跡遠見塙古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
 第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）

- 第28集 年報 2 (昭和56年 3月)
第29集 郡山遺跡 I -昭和55年度発掘調査概報一 (昭和56年 3月)
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報 (昭和56年 3月)
第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告 II (昭和56年 3月)
第32集 湾ノ東遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第33集 山口I遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書 (昭和56年12月)
第35集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第1次調査報告 (昭和57年 3月)
第36集 北前遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第37集 仙台平野の遺跡群 I -昭和56年度発掘調査報告書一 (昭和57年 3月)
第38集 鳥山遺跡 II -昭和56年度発掘調査概報一 (昭和57年 3月)
第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 I (昭和57年 3月)
第41集 年報 3 (昭和57年 3月)
第42集 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査一 (昭和57年 3月)
第43集 東遺跡 (昭和57年 8月)
第44集 湾ノ東遺跡発掘調査報告書 (昭和57年12月)
第45集 茂庭一茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第46集 郡山遺跡 III -昭和57年度発掘調査概報一 (昭和58年 3月)
第47集 仙台平野の遺跡群 II -昭和57年度発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第48集 史跡足塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報 (昭和58年 3月)
第49集 仙台市文化財分布調査報告 I (昭和58年 3月)
第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第51集 仙台市文化財分布地図 (昭和58年 3月)
第52集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第2次調査報告 (昭和58年 3月)
第53集 中田畠中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第54集 神明社墓跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第55集 南小泉遺跡一青葉女子学園移転新営工事地内調査報告 (昭和58年 3月)
第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 II (昭和58年 3月)
第57集 年報 4 (昭和58年 3月)
第58集 今泉城跡 (昭和58年 3月)
第59集 下ノ内浦遺跡 (昭和58年 3月)
第60集 南小泉遺跡一倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第61集 山口遺跡 II -仙台市体育館建設予定地一 (昭和59年 2月)
第62集 燕沢遺跡 (昭和59年 3月)
第63集 史跡陸奥国分寺昭和58年度発掘調査概報 (昭和59年 3月)
第64集 郡山遺跡 IV -昭和58年度発掘調査概報一 (昭和59年 3月)
第65集 仙台平野の遺跡群 III -昭和58年度発掘調査報告書一 (昭和59年 3月)
第66集 年報 5 (昭和59年 3月)
第67集 富沢水出遺跡 -第一号 -泉崎前地区 (昭和59年 3月)
第68集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第3次調査報告 (昭和59年 3月)
第69集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅴ (昭和59年 3月)
第70集 戸ノ内浦跡発掘調査報告書 (昭和59年 3月)
第71集 後河原遺跡 (昭和59年 3月)
第72集 六反田遺跡 II (昭和59年 3月)
第73集 仙台市文化財分布調査報告書 II (昭和59年 3月)
第74集 郡山遺跡 V -昭和59年度発掘調査概報一 (昭和60年 3月)
第75集 仙台平野の遺跡群 IV (昭和60年 3月)
第76集 仙台城二ノ丸跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第77集 山田上ノ台遺跡 -昭和59年度発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第78集 中田畠中遺跡 -第2次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第79集 欠ノ上 I 遺跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第80集 南小泉遺跡 -第12次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第81集 南小泉遺跡 -第13次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第82集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅵ (昭和60年 3月)
第83集 年報 6 (昭和60年 3月)
第84集 仙台市文化財分布調査報告書 III (昭和60年 3月)

仙台市文化財調査報告書第75集
仙台平野の遺跡群 IV
—昭和59年度発掘調査報告書—

昭和 60 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市岡分町 3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課
印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト
仙台市立町24-24 TEL 63-1166

